

「ミツイロベニタケ」と呼んでいるベニタケ属

波部 健

よく、「どんなきのこが好きですか？」と聞かれるのだが、ライトユーザー？の場合は「どんな姿形や種類のきのこが好きか」という意味で、ヘビーユーザー？の場合は「どの分類群（属など）に興味があるか」という意味で聞かれていると思う。

どんな姿形が？という、月並みかもしれないが、大きくてきれいで写真映えするものということで、テングタケ属、イグチ属、ベニタケ属あたりになるだろう。一方で、どんな分類群が？という意味ではどうだろう？ベニタケ属なんかは身近でよく見られる一方で詳しく調べている人間は少なくないかもしれない。

数年前から「ベニタケ研究会」なるグループの発表会や合宿に参加しているのだが、なんで「調べている人間が少ない」のかわかった。他の分類群、きのこ全体でも未知の領域は多いのだが、ことベニタケ属に至っては、身近で普通に見られるものでも名前がわかるものが非常に少ない。赤いベニタケひとつとっても、たいがいすぐにドクベニタケだとかヤブレベニタケだとか決めつけやすいが、そんなことはない。見た目だけではわからないし、まさに「全部同じじゃないですか？」の世界。

ベニタケ研究会の富士山合宿に参加してわかったことは、標高の高い地域で見つかる種類は研究の進んでいる欧州の種類と同じ

ものがあるためまだ同定しやすく、むしろ、身近な地域である低地で見つかるものは未知種だらけであるということ。「ベニタケは沼だ」とか「やめといたほうがいい」などと言われるのはそのためだとわかった。それでもなにかひかれるものがあるから不思議だ。

赤やらピンクやら緑やら紫やらカラフルな色彩を持つ種類が多いベニタケ属にあって、さらに複雑で印象深い種類に出会った。

最初に出会ったのが2007年の仙台で、当時、各地のきのこ会が集まって合同合宿が開催されたのだが、採集品の中でひととき印象的なものがあつた。カサ中央は赤紫色で周辺部は草色、柄はピンクという色彩に、傷つけると黒変するという特徴があつた。

そして2009年。今度は京都市東山で見た瞬間、あのときのものだと思い出した。仙台では1個の採集品を見ただけだったが、今回は複数群生しているのを目の当たりにしたの



「ミツイロベニタケ」発生のような様子

で生態を撮影し、持ち帰った標本で撮影と記録を行った。そして、標本の一部を大阪市立自然史博物館に送った。

その後、2012年以降はほぼ毎年見かけるようになった。さらに、ネットでも同じ種類と思われるものがアップされていることに気がつき、南は長崎、北は福島県にも分布しているらしいことがわかった。

2017年に開催された日本菌学会のフォーレでは千葉県銚子でも見つかっているというので、全国的に広く分布しているようだ。



大阪府箕面市のベニタケ属



2009年発生分の標本

ぬれているのでカサに粘性が出ている



京都市吉田山のベニタケ属と変色のようす



2015年10月発生

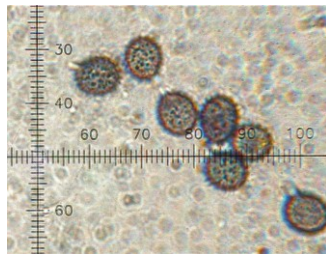


青森県岩木山のベニタケ属

以下はこれまでに観察した結果のまとめ

- ・発生時期：7月～10月
- ・発生環境：主にブナ科の広葉樹林（京都ではシイ林）
- ・発生状況：地上に散生
- ・カサ：まんじゅう型から漏斗型に開く。大きさは最大で10cm程度。中央付近が赤紫で周辺部が淡緑色だが境界が明瞭ではない。中心部は黄色の部分が入ることが多い。湿時粘性あり。粒状線なし。表面はざらつくことが多い。
- ・ヒダ：黄白色で密。湾生ぎみの離生。
- ・柄：長さ6～7cm程度、白色に黄色やピンクを帯びる場合あり。粘性なく、ほぼ平滑。若干縦方向のしわあり。ほぼ円柱状。
- ・におい・味：無味無臭。
- ・肉質：柄の表面は硬く、内部は成長すると柔軟な髄質になる。
肉の断面は最初白色だが、傷つけるとほどなく赤変し、やがて黒変する。きのこ全体の表面も古くなると黒っぽくなる。

- ・孢子：アミロイド。径6～7 μm の類球形でくちばし状突起あり、表面に突起あり。



孢子（メルツァー処理後。1目盛は1 μm ）

- ・シスチジア：棍棒状で先端に突起がつくものもあり。長さおよそ50 μm 。側と縁は同形。



ヒダの縁・側シスチジア

子実体の色彩は複雑で、カサ表面はきれいに3色になっているものもあれば、ほとんど赤紫の場合や淡緑色の場合もある。ただいづれの場合も中心付近が黄色いことが多い。



カサに赤紫が多い個体



黄緑が多い個体

あるとき、大阪市立自然史博物館で本郷次雄氏の描画を見る機会があったが、その中の1枚に、これとよく似たベニタケ属が描かれており、名前はないが、名前がついていなかった。描写されている変色性や孢子、シスチジアの形態もよく似ている。同じものを本郷次雄氏も認識されていたと思うとなんだか感慨深い。

このベニタケは未知種と思われるが、分類的にはどのあたりに位置するのだろうか？ ススケベニタケ (*R. decolorans*) や同じく赤変後黒変するイロガワリベニタケ (*R. rubescens*) と同じススケベニタケ節ではないかと思う。これまででも他に同じような変色性を示すベニタケ属を見つけているが、



赤変後に黒変する



古くなったもの

詳細に比較するための検討まではできていない。

このベニタケはいろんなところでいろんな名前と呼ばれているが、私は仮称として「ミツイロベニタケ」と呼んでいる。アイタケ (*R. virescens*) に似ているが、カサが赤もしくは緑と赤を交えるフタイロベニタケ

(*R. viridi-rubrolimbata*) というものがあるように、カサが赤紫、草色、黄色の三色を基本色とすることから「ミツイロベニタケ」というのがよいのではないかと思っている。最近の新しい和名にはやたらと長く、説明くさいものが多いと感じている。「既知種+特徴」というパターンや形容詞がふたつ付く和名ではなく、できるだけシンプルにきのこの特徴を表す和名がいいと思っている。

将来の目標として、これを新種記載できればと思っているが、これがなかなかハードルが高い(フウセンタケ属よりはましかもしれないが)。しかし、それを自分の究極の目標としてこれからも観察を続けたい。

2018年のスライド会で「ティラミステングタケ」を日本新産種で、このベニタケを新種記載することを目標にしたいと言うと、浅井淑子さんに「よく言った。がんばれ!」と励ましていただいた。しかし、そのときはそれが最後にお話する機会になるとは思いも寄らなかった。5月に長野県で開催された日本菌学会大会で突然の訃報を耳にしたときは信じられなかった。背中を押してくださったことに感謝するとともに、目標に向かって努力することがその激励に応えることになると思っている。



房総きのこ今昔 一東葛地域の初茸狩一

昭和10年ごろの総武鉄道(のちに東武野田線)のパンフレットの年間案内には、'初茸狩の好適地'として流山市の「初石」、柏市の「高柳」、野田市の「川間」附近があげられている(写真、部分拡大)。ハツタケはマツの存在を示し、案内に掲載されるということは、多くの人々が集えるほどたくさん採れたということでもある。現在は住宅地や畑地が広がるこのあたりは、かつて小金牧といわれた馬の放牧地で、江戸時代には多くのマツが植林されたそうだ。林は定期的に管理され、切り出された材は、おもに薪炭とされ江戸へ運ばれた。牧は明治時代に開墾され、集落がつくられるもまだ広大な土地が残され、江戸時代同様に飼いや葉をとる目的での利用もなされていたそうだ。ハツタケは10~20年くらいの若いマツによく発生する。東京より電車で日帰りできる東葛地域の初茸狩は、江戸時代から続く、実益とレジャーを兼ねた季節の大イベントでもあったことだろう。(吹春公子)

十 月
初茸狩、初石、高柳、川間驛 附近好適地、清水公園釣堀